

# 学級通信と学級経営

足利市立北郷小学校  
市 橋 雅 子

## 1 はじめに

勤め始めて数年して1年生を担当した。しかも単級でまったくの1クラスだけの1年生であった。担任する学年が大きな6年生から小さな1年生に変わったとまどいと、1クラスでやっている不安の中で、素直なあどけない1年生との毎日は心なごむ毎日であった。そんな1年生のことを書いた「わかば」が初めての学級通信であった。ガリ版の上で書いた学級通信には1週間の行事予定や学習予定、それに種々の連絡やお願いなどが書かれた。毎日子供達とふれ合う中でいろいろな発見があった。教室こぼなしコーナーに「給食が始まって2日目、おたのしみ献立。『食べられるだけ食べなさい。』おたのしみ献立だけあって量も多い。おとなも腹いっぱいになる量。給食終わって、『先生、ぼくのおなか見て。』見てびっくり。風船が入ったようなおなか。子どもってのびるんだなあ。」など、かわいいエピソードが載ったこともあった。しかしその「わかば」も2学期になると出る回数が減ってきた。

新しい学校に移って、毎日学級通信を書いている先生を知った。それを横目で見ながら、驚きと自分にはとても出来そうにないとあきらめがあった。そんな中で学級通信との大きな出会いがあった。夏休みに行った研究会でリュックサックを背負ってやってきた先生がいた。その先生は研究会場のホテルのロビーに店を出した。店には何十冊もの学級通信集とはかりが1個。思わず手にしたのが学級通信「遠くまで行くんだ」であった。4、5月分が1冊となっていて厚さ17mmもあるので、どっしりとした手ごたえであった。またその研究会でやはり学級新聞とずっと取り組んでいるという静岡のK先生にも会った。その先生は自分の書いた本の中で、「ぼくの生き方という子供への接し方がみごとうち砕かれたのは、I先生から『これ今学期のぶんだよ。』って渡された百ページぐらいの製本された学級通信だった。なにげなく読みだしたのがやめられなくなって夢中で読み続けて、とうとう夜明けまで何回もくりかえし読んでしまった。なにに感動したかという、その先生の子供たちに対する姿勢というか、かまえのようなもの、それです。どういう学級にしたいか、どういう子に育てたいかという教師の姿勢が一貫して流れている。子供に対しての取り組みということでは、ぼくも子供たちとよく遊んだし、かれらにかなり強烈な印象を残してきたという自信はあった。それが一貫性ということになると、自分としてはやってきたつもりでもほかの人にはわからない。それを文章に書いて他人に公開するということはきびしいけど、言っていることとやっていることを一致させなければならないわけで、その先生はこの点までまぎれもなく一致している。そのことに打たれたんだね。」と書いていた。「毎日だから書けるんで、週1回月1回では逆に書けない。」とさらりと言い切ったK先生の言葉が心の中に深く残った。もしかしてできるかもしれない、やってみようという気持ちに変わったのがこの夏休みであった。2学期になって学級通信「ひまわり」は日に日に号数を重ねていった。

# 学級通信と学級経営

足利市立北郷小学校

市 橋 雅 子

## 1 はじめに

勤め始めて数年して1年生を担当した。しかも単級でまったくの1クラスだけの1年生であった。担任する学年が大きな6年生から小さな1年生に変わったとまどいと、1クラスでやっていく不安の中で、素直なあどけない1年生との毎日とは心なごむ毎日であった。そんな1年生のことを書いた「わかば」が初めての学級通信であった。ガリ版の上で書いた学級通信には1週間の行事予定や学習予定、それに種々の連絡やお願いなどが書かれた。毎日子供達とふれ合う中でいろいろな発見があった。教室こばなしコーナーに「給食が始まって2日目、おたのしみ献立。『食べられるだけ食べなさい。』おたのしみ献立だけあって量も多い。おとなも腹いっぱいになる量。給食終わって、『先生、ぼくのおなか見て。』見てびっくり。風船が入ったようなおなか。子どもってのびるんだなあ。」など、かわいいエピソードが載ったこともあった。しかしその「わかば」も2学期になると出る回数が減ってきた。

新しい学校に移って、毎日学級通信を書いている先生を知った。それを横目で見ながら、驚きと自分にはとても出来そうにないとあきらめがあった。そんな中で学級通信との大きな出会いがあった。夏休みに行った研究会でリュックサックを背負ってやってきた先生がいた。その先生は研究会場のホテルのロビーに店を出した。店には何十冊もの学級通信集とはかりが1個。思わず手にしたのが学級通信「遠くまで行くんだ」であった。4、5月分が1冊となっていて厚さ17mmもあるので、どっしりとした手ごたえであった。またその研究会でやはり学級新聞とずっと取り組んでいるという静岡のK先生にも会った。その先生は自分の書いた本の中で、「ぼくの生き方というか子供への接し方がみごとくち砕かれたのは、I先生から『これ今学期のぶんだよ。』って渡された百ページぐらいの製本された学級通信だった。なにげなく読みだしたのがやめられなくなって夢中で読み続けて、とうとう夜明けまで何回もくりかえし読んでしまった。なにに感動したかという、その先生の子供たちに対する姿勢というか、かまえのようなもの、それです。どういう学級にしたいか、どういう子に育てたいかという教師の姿勢が一貫して流れている。子供に対しての取り組みということでは、ぼくも子供たちとよく遊んだし、かれらにかなり強烈な印象を残してきたという自信はあった。それが一貫性ということになると、自分としてはやってきたつもりでもほかの人にはわからない。それを文章に書いて他人に公開するということはきびしいけど、言っていることとやっていることを一致させなければならないわけで、その先生はこの点までまぎれもなく一致している。そのことに打たれたんだね。」と書いていた。「毎日だから書けるんで、週1回月1回では逆に書けない。」とさりりと言いつつ切ったK先生の言葉が心の中に深く残った。もしかしてできるかもしれない、やってみようという気持ちに変わったのがこの夏休みであった。2学期になって学級通信「ひまわり」は日に日に号数を重ねていった。

## 2 学級通信にみる教育実践

### (1) 学級通信のあゆみ

①ひまわり	昭和54年9月	～	昭和55年3月	140号	(2学年)
②なかま	昭和55年4月	～	昭和56年3月	208号	(2学年)
③あおぞら	昭和56年4月	～	昭和57年3月	203号	(3学年)
④あゆみ	昭和57年4月	～	昭和58年3月	161号	(3学年)
⑤ともだち	昭和58年4月	～	昭和59年3月	177号	(4学年)
⑥道程	昭和59年4月	～	昭和60年3月	35号	(6学年)
⑦あおぞら	昭和60年4月	～	昭和61年3月	5号	(5学年)
⑧あおぞら	昭和61年4月	～	昭和62年3月	125号現在	(6学年)

### (2) 学級通信の実践例

#### (ア) 授業風景

「かけ算の文章題のテストで式を $2 \times 3$ と書いたら、ばつをもらってきた。 $3 \times 2$ でも $2 \times 3$ でも同じではないか。どうしていけないかなあ。」という質問を知人から受けたことがあった。学校の先生は当然のこととしてやっていることでも、親からすると不思議で理解できないということがあるものである。自分がわかるのだから相手もわかると思ったら大まちがいである。学級通信に授業風景や生き生きとした子供たちの姿をのせることで、授業内容や子供たちの様子を具体的にわかってもらえるという良さがある。次のものは今までに出した学級通信の中の授業風景について書いたものである。

#### a. 粘土でボールづくり

「このごろの子供は手先が不器用だ。」とか、「ひもがむすべない。」とかいう言葉をよく耳にします。確かに子供たちの様子を見ていると不器用な面が見られます。ぞうきんがしばれないとか、ひもがしばれないなど。

きのうは図工の時間に土の粘土でボール(球)づくりをしました。じゃがいもとテニスボールを見くらべながら、いかにまんまるい球にするか、いっしょうけんめい取り組んでいたようですが、かんたんそう得意にまんまるにするのはたいへんなようでした。なにしろ作っているうちに粘土がかわいて水分がなくなって表面にひびわれができてしまうものですから。ぬれぞうきんで包んだり、水をつけながらやらなくてははいけません。粘土をこねたりするのに力があるので床の上でやっていた子もたくさんいました。できたと思ってボールと見くらべると、まだまだでこぼこだったり、とにかく4時間目が終わるころには、みんななんとか球ができあがりました。これを2～3週間ぐらい干して、焼いてから色できれいに絵付けをしてできあがりです。

手先の器用さは脳に影響するといわれています。最近では便利な機械や道具ができてい

で、手先を使う機会が少なくなっているせいでしょうか、不器用な子が多いのは。とにかく手先を使う機会をできるだけつくって、手先を訓練することが大切ですね。

..... 2の2学級通信「ひまわり」昭54年9月6日 .....

図工の時間粘土のボール作りに四苦八苦している子供たちの様子を見て、手先の不器用さに気がつき、何でも便利になっている今の世の中に生活している子供たちにとって手先を使うような機会をどんどん作っていかねばならないと考え、通信に書いたものである。

..... b. くり下がりのひきざん .....

ひき算でいちばんむずかしいのはくり下がりのひき算です。今はさらに2かいくり下がりのひきざんですから、もっとむずかしいわけです。きょうはくり下がりの2つの方法についてお話ししましょう。

たとえば $12-7$ ですが、2から7はひけないので10からかりてくるのですが、まず第一の方法は10から7ひいて、あまりの3を一の位の2と加えるやり方です。式を書くと、

$$12-7 = (10+2) - 7 = (10-7) + 2 = 3+2 = 5$$

となります。これは $10-7=3$ でひき算をやり、そのつぎに $3+2=5$ というたし算をやる方法です。もう1つの方法は12から7をひくのには2から7はひけないが、ひけるだけひいておくと、 $7-2=5$ だけまだひきたりない。その分だけ10からひいておく、 $10-5=5$ というやり方です。式に書くと、

$$12-7 = (10+2) - 7 = 10 - (7-2) = 10-5 = 5$$

となります。この計算ではひき算をやって、またひき算をやりますから2回ひき算をやることとなります。どちらもまちがいはありませんが教育的にはちがいがあります。第一の方法のほうが、第二の方法よりやさしいので、はじめは第一の方法で考えたほうがいいのです。だから第一の方法で教え、慣れてきたら自分の好きなやり方でやらせるようにしてやったほうが良いようです。(慣れてくると子どもは自分で第2の方法を発見することがあります。) 学校でも第一の方法でやりました。2かいくり下がりはこちらを2かいやるのですから、かなりむずかしいのです。

..... 2の2学級通信「ひまわり」昭54年9月10日 .....

くり下がりのひきざんのところでつまづく子がよくいる。特に2かいくり下がりになると、よけいむずかしくなるものである。ここではひき算の二つの方法、減加法と減減法についてわかってもらうために書いたものである。あれもこれもといろいろな方法を初期の子供に教えてはとま

どってしまって、ますますわからなくしてしまうので、わかりやすい減加法を学校では教えているを知らせたものである。

..... c. やっと出現したピテカントロプスにみんな大喜び.....

6年生の社会科の学習では歴史の学習が中心です。教科書には“人間の歩み”という題がついており、縄文時代あたりから始まっています。しかし人間の歴史をたどっていくとオーストラロピテクスといわれた猿人までたどりつきます。そこで猿人がいた時代から現在までの年表を作ってみました。ところがこれがなかなかの仕事なのです。なぜかという猿人がいた時代は今から200万年前といわれていますから1000年を1mにとっても全部書くのに2000m紙が必要になるわけです。これではとても教室の中におさまりきれません。そこでさらに縮めて10000mを1mにすることにしました。これなら紙が20mあれば足りるし、教室の中にもおさまるだろうと考えたからです。それでも20mというのは結構長いものなのです。

さていよいよその授業の日、きれいな箱に入った20mの年表をとりだし、200万年前の時代からくるくと巻きもどしてひろげていったのですが、オーストラロピテクスの顔を画用紙いっぱいにかいたものを、まず最初に「こんな人だったんですね。」と見せると「うわあー。」「すごい顔。」と驚きの声。さらにどんどんひろげていって、かなりいったところで、ピテカントロプス（原人）の登場。今度はどんな顔なんだろうと期待していた子供から、「ピテカントロプス（原人）は。」と催促の声、さがしても見つからない。それもそのはず、原人はかかなかつたのです。そのうち「原人さんコール」が始まったが、「今日は原人さんはお休みです。」ということになりました。これであきらめない子供たちは、「じゃいつでるの。」の質問。「この次かなあ。」といったところで納得。それからまたひろげていって、ネアンデルタール（旧人）の登場。さらに子供たちの期待感が高まっていたので顔を見せたたんものすごい歓声。最後のクロマニヨン人（新人）の時には迫力満点でした。

20mの年表を何人かの子に手伝ってもらって教室の中でのばしてみたら、前の黒板からスタートして第1コーナーを曲がって、第2コーナー、そして第3コーナーを曲がって少しいったところで終わりました。その長さに子供たちは驚いていましたが、さらにこれから学習していく縄文時代から後の時代はこの中の最後の約10cmくらいと聞いて2度びっくり。「たったのこれだけなの。」この10cmの内容がもりだくさんであることはこれからわかっていくことでしょう。

子供というのは記憶力がいいもので、次の社会の時間まで、しっかりと原人のことを覚えていました。用意しておいた特大の原人の顔を見せるとみんな大喜び。かなり親しみを感じていたようです。

..... 6の2学級通信「あおぞら」昭61年4月28日 .....

歴史の学習の最初の頃の授業風景である。人間の歴史という視点から歴史を見てみようと考え、猿人がいた200万年前からの年表を作って子供たちに見せたのである。障子紙に20mの年表

をかき、猿人、原人、旧人、新人の顔をかいたものを用意した。子供たちは大変興味を示した。しばらく原人ブームが教室にひろがった。この年表は今も教室にはってある。

#### ..... d. 子 守 歌 .....

「手ぶくろを買いに」もきょうは4段落と5段落（最後のところ）を勉強しました。その中に、「あるまどの下を通りかかると、人間の声がしていました。なんというやさしいなんという美しい、なんというおっとりとした声なんでしょう。『ねむれねむれ母のむねにねむれねむれ母の手に——』子ぎつねはきっと人間のお母さんの声にちがいないと思いました。……」というところがあります。そこのところをやっている時に、「ねむれねむれ……」と歌い出した子がいました。

「あら、この歌知ってるの。」「うん。」というわけで、「この歌知っている人。」という8名くらいの子が手を上げました。そのうち、「うちはちがうん。カラスだもん。」という子がいて、「カラスって『カラスなぜなくの』かい。」「そうそう。」

ことついでにどれくらいの子が子守歌を聞いたことがあるのだろうかと思い、「お母さんが子守歌を歌うのを聞いたことがある人。」と聞いてみたところ、30名程度の子が手を上げました。ずいぶん覚えているものですね。「うちはお母さんじゃなくておばあちゃん。」なんていう子もいましたよ。

「じゃみんなのうち『ねむれねむれ』や『カラス』のほかどんな子守歌を聞いたの。」「ねーんねんころりよ、おころりよーっていうの。」「そうそう、うちもそれ。」というわけで助戸小3年2組では「ねんねんころりよ」の子守歌で育った子が一番多かったようです。「こんにちは赤ちゃん」で育ったという子もいましたよ。いずれにしても、多くの子供がお母さんやおばあちゃんの歌う子守歌を聞きながら育ったということはとてもいいことですね。子守歌を歌ったり聞いたりしていた親子のつながりはいつまでも持ちつづけてほしいと思います。みなさんの家ではどんなふうに親子のつながりをもっていますか。食後の話し合い、お風呂の中での会話、キャッチボール、いろいろありますが楽しいものがあったらお知らせください。

..... 3の2学級通信「あおぞら」昭57年2月12日 .....

授業の中で子供が思わず歌い出した子守歌を聞いて、とってもあったかいものを感じ、親子のつながり、ふれ合いのことといっしょにのせたものである。

..... e. やったあ！全員とべたのです。 .....

土曜日の体育で跳び箱をやりました。この前「だいたい跳べない子がいるので……。」という  
ことを書きましたが、何と夢が本当になったのです。9名体育の時間のはじめに跳べない子  
がいたのです。これは何とかしなくてはと思っていたので、その子たちのところについて、  
跳び箱にまたがって手をついて手で体重を支えるという動作をくりかえし行い、その後で、  
「もう跳べるよ、跳んでごらん。」と言って跳ばせてみたところ、9人のうちの2人は1回目  
にして、いとも簡単に跳び越してしまいました。「やったあ！」跳んだ本人も見ている子供た  
ちも私も、みんな思わず拍手です。1度跳んでしまうと後はもう、ぴゅーんと調子のいいも  
のです。何回かやっているうちに9名中6名は次々と跳べるようになりました。一人一人跳  
べるようになっていくのは実に気持ちの良いものです。この後に感動的な場面があったので  
す。まだ3名跳べなかったのですが、もしかするとみんなのしている場面なら跳べるようにな  
るかもしれないと思い、高い方の跳び箱のグループから一人一人みんなの前で発表するこ  
とにしました。順々にやってきて、いよいよ一番低いところにきました。「さっきまでとべな  
かった人たちですが何人とべるようになったか教えてみよう。」「1人。」「2人。」「3人。」「  
4人。」「えっ、すごい。」みんなもびっくり。そして9人全員とべたのです。みんな驚きま  
したが、一番驚いたのは跳んでしまった本人です。「えっとべたの。とべた。とべた！」

..... 4の2学級通信「ともだち」昭58 5月10日 .....

子供たち全員に何とか跳び箱をとばせたいと思っていたとき、「跳び箱は誰でも跳ばせられる」  
(明治図書、向山洋一著)という本に出会い、もしかしたら全員跳ばせられるかもしれないと思  
い実際にやってみたところ、夢ではなく本当に全員がとべたときのものである。跳び箱がとべた  
というこの経験は、「できるんだ」という自信につながり、次の意欲を高める上で大いに役立った  
と同時に、全員がとべたということはみんなの喜びともなったものである。この喜びは通信を読  
んだ親たちにも共有できたのではないかと思う。

#### (1) 生き生きとした生活の様子

1人の3分の1くらいの長い時間を学校で過ごす子供たちは、ともだちとのかかわりあいの中  
で様々な姿を見せてくれる。子供との生活の中で大人が失ってしまった子供らしさや成長してい  
く子供の生き生きした姿、それぞれの子供の中に光る個性などを発見したときの驚きや喜びは実  
に大きく、そんな日の通信はうきうきした気分を書くので実に楽しくなるものである。親はこの  
様な子供たちの姿を知ることによって、多面的に子供を理解することができるのではないだろ  
うか。

..... a. カイコ人間出現.....

しばらく前にカイコがクワの葉を食べず、頭を持ち上げてねむっているようになっていたことがありました。するとその翌日、カイコたちはみんな脱皮していました。箱じゅうに脱皮したぬけがらがあつたので、子供たちにもよくわかりました。

すると、その日の体育の時間が始まる前、子供たちは体育袋を持ってきて着がえ始めたのですが、みんなにこにこしながら、「脱皮。脱皮。」と言っているのです。シャツを上の方にもこもこと上げながら、「脱皮。脱皮。」

カイコにでもなっている気分なのです。1人が始めるとみんなおもしろがってやるものだから、教室じゅうで子供たちの脱皮が始まってしまいました。31人もの子供が洋服を上にあげながらの脱皮。カイコ人間の出現でした。

..... 3の2学級通信「あゆみ」昭57年6月8日 .....

これは40匹のカイコを飼っていたときのものである。このカイコは時々「あゆみ」に登場したペットくんなのですが、何しろ数が多くてえさのクワの葉集めがたいへんで、家族で協力してくれた家もあった。そのカイコの脱皮の様子を観察した子供たちは、そのことにたいへん驚き、興味を示し、すぐにそれをまねしたのである。驚きを体で表現したのである。

..... c. 先生、さわってもいいですか.....

休み時間や放課後など私が机の所にいると、子供たちがやってきては何かしゃべっていきます。「○○ちゃんだまってさわっているよ。」「あっ、先生さわってもいいですか。」「いいよ。ちょっとだけね。ほら、ちょ。」「あつわるいんだ先生は。」などといいながら机のまわりでがやがや。

何で「さわってもいいですか。」と聞くのかというと、実は以前にこんなことがあったのです。友だちの持ち物をだまって使ったり、持ち出したりしてこわしてしまったり、どこかにやってしまったり……。その時、友だちの物にだまってさわったり使ったりしてしまうのは良くない。その様な時は持ち主の許可を得てからにしなくてはいけないという様な話をしたのです。それからは机のところにやってきては、「先生、机にさわってもいい。」「これにさわってもいい。」とうるさいくらいに聞くのです。中には「先生の髪の毛にさわってもいい。」まじめな顔で「先生の体にさわってもいいですか。」「えっ。」どきっ。「先生の足にさわってもいい。」というなり机の下にもぐっていくのです。まるでねこか犬みたいです。きのうもやってきて、「学校にさわってもいいですか。」といったので、「だめ。」といったら、みんなして「わあー。」といてびよんびよんはね始めました。「とべなきゃできないよ。」この意味わかりますか。

..... 3の2学級通信「あおぞら」昭56年7月3日 .....

子供たちはおもしろいことを考えついたり、変わった行動をしたりすることが時々ある。そんな中で子供らしさ発見することがよくある。これはその中の一つである。

## (ウ) 集 会 活 動

全校集会、学年集会、学級集会と種々な集会がある。みんなで集まって行う集会は集団の中の1人であることを子供たちに意識させると同時に、楽しさや感動を子供たちに与えることが多い。学級集会は子供たちで立案し計画を立て実行することができ、子供たちの自主性をのばしたり、クラス全員が集会にむかって心をつ一つにして取り組めたりするので、学級づくりの上では欠かせないものだと思う。そんな集会の感動を学級通信にのせることもある。

### ..... a. 飛んだ一、みんなの青雲だあ.....

澄み渡った青い空に42個の連だこが上がったら素晴らしいだろうなあ。しかもみんなが一つずつ手作りで作ったたこが、こんな思いが3月17日に実現したのです。

連だこはまず1人1個ずつのたこを作るところから始めました。たこの型紙を作ったり横骨や縦骨を作ったり。一番苦勞したところは何といっても横骨の竹ひごを中央から20°の角度に曲げるところでした。竹ひごを水でしめらせてからろうそくの炎にあてて20°の角度がつくように曲げるのです。のんびり炎にあてていると黒くこげてしまうし、そうかといって急いで曲げると折れてしまうし、そのタイミングがむずかしいのです。とにかくその後和紙をはり、思い思いの絵を描いて出来上がりました。それらを1本の糸につなげ連だこにして赤松グラウンドに出発したのです。1人1個ずつ連だこを持って一直線に並びました。何しろこの日は風の強い日で大変でした。骨と紙がはがれてしまっ、あっちこっちから、「セロテープ。」とセロテープ係を呼ぶ声。合図と同時にみんなの手からたこはなれて、どうなるかとみんなの見守る中、たこが上がったのです。天高くとまではいきませんでしたが、とにかく上がったのです。みんなが苦勞して作ったたこが、みんなつながって上がったのです。その後フェンスにからまって落ちてしまったのですが、日記の中にこんなことを書いてくれた子がいました。

「……とんだ時とても感動しました。宣伝でいっている青雲ほどは、まっすぐにびっちりとはばないけれどけっこうよくとんでいるからです。それに自分たちが一つ一つ手で作った物だと思うとよけいうれしくなります。わたしはうれしくて自分のたこをおいけてまわりました。そして落ちそうになると、落ちないようにもったり。本当にとんだ時はうれしかったです。それにとてもきれいに見えました。一番高く上がった時は、まるで天女が天に上がって行く時にかかる星の橋のようでした。また作ってみたいです。

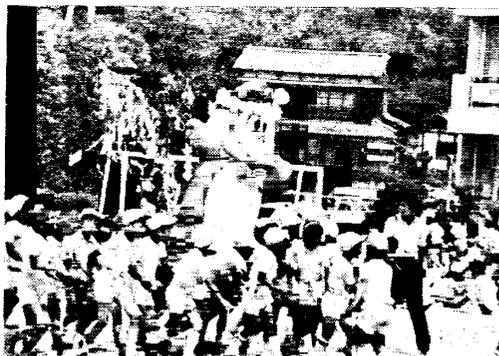
..... 5の2学級通信「あおぞら」昭61年3月22日 .....

これは1人1個ずつ作ったたこを連だこにして飛ばしたときのものである。連だこ作りは初めてのことだったので上がるかどうか不安であった。1人1個ずつたこをもって一直線に並び合図に合わせてたこを手から一斉にはなしたとき、たこは大空へと舞い上がった。このときみんなは興奮してたこといっしょに走ったのである。何ともいえない感動があった。

### ..... b. おみこし（ペンギンちゃん）完成.....

和紙はりも終って第4段階の仕上げをしていたペンギンちゃんみこしも、きのうついに完成しました。仕上げグループはどこのところを何色にするかとか、ぼうしやネクタイは何でつくるかなどを決めた後、体の色ぬりから始めました。

体は水色と白色なので水色の絵の具を出してぺたぺた。単純な仕事ですが子供たちにする結構おもしろいでしょう。「たのしい、たのしい。」と言いながらぬっているとそばで見ているちがう仕事班の子が「ぬらして、ぬらして。」「だめだめ。だってもう別の仕事をしたでしょう。」と言われても、自分の絵の具セットから筆を持ち出してぬろうとする子などいました。「だめだよ。〇〇ちゃんは。」「だってぬりたいんだもん。おもしろそう。」よほどぬりたかったのでしょう。ぼうしは赤いぼうしです。家に布をもって行って何人かの子で縫ってきました。ぼうしの先には白いポンポンがちゃんとついています。ピンクと青のかわいいちょうネクタイもついています。ペンぎんちゃんの名前については今日決定しました。学級会で話し合った結果“ペンちゃん”になりました。みんなで完成の乾杯をカルピスでしました。



「ペンちゃんに乾杯！」

..... 3の2学級通信「あゆみ」昭57年7月10日 .....

夏祭り集会めざしておみこし作りをしていたときのものである。どのクラスでもそれぞれに工夫をこらしたおみこしを作っていたとき、高さ2メートル以上の大きなペンちゃんみこしを作上げたのである。作ったのはいいのだが教室を出るときに一苦勞であった。ドアを全部取りはずしてななめにしてやっと出たのである。このペンちゃんは“かわいいで賞”をもらったのである。

### (五) 日 記

学級通信に欠かせないのが子供たちの日記である。学級通信作りと平行して、日記も学級経営の一つとして行っている。この日記は初めのうちはノートに書いていたが、途中から印刷したものを用意した。印刷した用紙7枚と表紙をつけてホッチキスでとめて日記帳の出来上がりである。これを2冊持っていて1日おきに使っている。用紙を常に教室の箱の中に入れておき、書き終わってしまったら日記ファイルにとじ、新しいものを自分で作ることにしている。毎日赤ペンを入れて返している。その中から1～2名の子の日記を学級通信にのせている。どの子ものるようにのせた子は名簿に記録している。これが子供たちにとってはなかなかの人気の、日記のをせられない日などがあると、「今日は日記ののってないよ。どうしたの。」などと催促されてしまう。通信を配るとまず初めに子供たちは日記コーナーを見る。そしてどの子のどんな日記ののったかということを実によく覚えているものである。子供たちにとって友だちの日記というのはかなり

刺激になるようであり、お互いを知り合えるよい場でもあるようである。

..... a. おじいさんとお話.....

今日山口のさか（利保町の）でおじいさんを見かけました。おじいさんは自転車にのって  
いました。またそのおじいさんがずいぶん老いていたこと。「こんにちは。」「こんにちは。」  
にっこり笑いながら言うところこんでくれたのか、「はいこんにちは。」と言ったのはいいも  
の、おじいさんは自転車からおり、話をしてくれたのです。

おじいさんは私らの目を見てじっと話をしてくれているのです。「おじいさんいくつに見  
える。」ときかれた時びくっとしたら「88歳だよ。」と言ったのです。すると88歳だけあって話  
しても言葉があまりよく通じないのです。でも目で聞いていたから少しわかりました。おじ  
いさんはいっしょうけんめい私らのために話してくれました。最後に「ありがとうございますま  
した。」「気を付けて下さいね。」と言ってさようならしました。

11月5日 O. T

..... 6の2学級通信「あおぞら」昭61年11月8日 .....

老人と子供たちの間にはかなりの年のへだたりがあって、何か遠い存在のような気がするこ  
とがあるものである。知らない老人ではあったがあいさつをしたことから老人との会話もてた。  
言葉はよく理解できなかったようであるが、老人がいっしょうけんめい話してくれたという心は  
T子に伝わったようである。こんな老人とT子とのふれあいは、今まで老人について深く考えな  
かった子供たちにはいい刺激となったと思う。

..... b. このごろの日記.....

ぼくは5年のときと6年の最初のほうは書くのがめんどくさくって1行も書きあがって  
いないのに日記を出していたが、このごろになって考えることができるようになったと思う。  
まだりんごは1つだけれども、このごろの日記は合格がほとんど全部といえるだろう。ぼく  
は今まで考える力がなかったのだ。ぼくも考える力ができてきたので、毎日日記はかならず  
かばんの中に入れといて、このごろは1回もわずれずもっていています。だからぼくは書  
くことは考えることだという国語でやったのがよくわかった。だからこれからは、長谷川さ  
んのもつ11さつとちょっとを目標にして、どんどん考えてどんどん書いていって去年みたく  
終わったのが3さつにならないように、考えてどんどん日記を書いていきたい。だから先  
生、日記は6年が終わるまでやらしてください。

5月7日 K. K

..... 6の2の学級通信「あおぞら」昭61年5月12日 .....

Kはけんかばやくて、本を読んだり書いたりすることが最も苦手な子であった。そんなKがあ  
る日突然この様な日記を書いてきた。驚きとうれしさに学級通信にのせた。これを読んだ子供た

ちもびっくりして、配ったとき「K君、すごい。」の声が出た。ここであらためて子供たちはK君のよさを発見して、K君に対する見方が変わったようである。みんなに認められてきたKはいろいろな活動で落ち着きと穏やかさ、やさしさが見られるようになった。今は文字をきれいに書こうという目あてを自分で決めて、日記帳に自分で横線をひいてがんばっている。

### c. 私たちの班

私たちの班のことで日記に書くことは6年生になって2回目のことです。班日記にも書きました。私たちの班は前よりよくなっていません。よくなっていないのではなく、かえって悪くなっているのかもしれない。今日も笛の練習があるのにみんな協力せず全員集まるとへんな音を出したりして、それと笛をおもいきり吹くのです。私たちだけでなく教室のみんなが、「うるさいからやめてよ。」とっていました。今日はほかの班にもめいわくをかけてしまったようです。班長もしょんぼりしていました。私はそんな班長になんにもしてやることができなかつた。私たち班員はよいところは一人一つあります。けど悪いところもあります。だから人の気持ちのわかる人になってくれればいいなあと思った。

9月24日

O. Y

音楽の時間に1週間に1回グループ発表の時間がある。発表する班になっているところは休み時間などを利用して練習している。これはそのときの話である。いろいろな班活動を通してぶつかり合ったり、助け合ったりしながらみがき合っていくものである。うまくいかない経験も子供たちにとっては大切な経験だと思う。このようなときは班会議を開いたりして班長を中心に助け合える班を作ろうという取り組みが続くのである。

### (4) 親とのかかわり合い

学級通信を読んでいる親からお手紙が届くことがある。またどこかで親に行きあったときには、学級通信の内容が話題となり話がはずむものである。学級懇談の席で、「クラスの子のことがよくわかり、子供たちにも親しみが感じられる。」とか「子供を育てていると、これでいいのだろうかと不安になることがよくありますが、通信を読んで他の子供たちのこともよくわかり大変参考になります。」と言われたことがある。親から届いた手紙を通信にのせることもある。

### a. 親子のふれ合い

ひまわりのおたよりが毎日くる様になってから、今まで一方的だった話も、ほんとうの会話が出来る様になり、親と子のふれ合いも多くなりました。ものぐさ病の治療の時、進んでガラスみがき、タタミの水ぶきなどしてくれました。そして、「来週の日曜日は台所をもっときれいにしようよ。」とってお姉さんと一緒に流しをピカピカにみがいてくれました。私がいかがよりもピカピカなのでとても頼もしい感じがいたしました。……

さて10月13日(土)の午後の出来事をお話しましょう。10月11日(木)のひまわりのおたよりで、

cm, mm, dl, 1 の勉強をしている事を知り, 10月12日(金)に机やひき出しをきれいにし、机のビニルがなんとなくきたないので、「新しいのを買って。」といますので、「机のたてよこの長さを測ってごらん。」と言いましたら、目を輝かせて一生けんめい測り、そしてメモ用紙に書いています。「お母さん測ったよ。」と言って持ってきました。思わず吹き出してしまいました。

$$\left( \begin{array}{l} \text{つくえ} \quad \text{よこ} \quad 60 \text{ dm} + 18 \text{ dm} = 78 \text{ dm} \\ \text{たて} \quad 50 \text{ cm} 5 \text{ mm} \end{array} \right)$$

です。この様な出来事があった時、ひまわりのおかげでユーモアに受け止め、親子のふれ合いが普段にも増して、喜び語り合え、また注意したりするというとてもすばらしいものがありました。

— A. Sさんのお母さんより —

..... 2の2学級通信「ひまわり」昭54年10月18日 .....

これはA. Sさんのお母さんから届いたおたよりである。これに説明をつけ加えて、通信に出したものである。

..... b. あったかいおたより .....

先生が宇都宮出張の日の事でした。瑞息で1時間遅れて教室へ入った子供に「あっ、ちかちゃん。」と言う声と同時に数人から拍手がおこりました。それをろうかから見て、沢山の言葉よりもこんなあったかいはげましをうけて……。私は心にあったかい物をそのまままっけて帰宅しました。こんなに良い子たちならきっとこの日も先生のお留守をしっかりと守って、りんごの色は真赤にぬられていたにちがいないと思いました。

— T. T君のお母さんより —

..... 2の3学級通信「な か ま」昭55年7月17日 .....

出張の時には黒板にリングをかいていくのである。自習がよくできると子供たちがそのりんごに色をぬっておくのである。この日はぬられないところは少しでほとんどぬられていた。

..... c. 一人の人間として .....

..... (前略) 3年生の時の「あゆみ」4年生の時の「ともだち」が私達母親にとってどれだけなぐさめられたり、お友達の気持ちを知ったり、自分の考えをもう一度考えなおしたりしたことか、とても役に立ちました。私自身まだ母親としての自信がもてず、どうして子供は私が思うように育ってくれないのだろうと考えてしまう時もあります。それはやはり親である私の態度にあるのかもしれませんが。自分では良いと思ってやっている事でも子供にとって迷惑であったり、よけいな事であったりするのでしょうか。私にはT夫を、一人の人間として見ていかなければいけないのではないかと思うようになりました。

..... T夫君のお母さんの手紙 .....

### (3) 学級通信づくりで留意したこと

#### (a) 文字は大きく読みやすく

毎日のように配られるとなると読む方もたいへんである。そこで読むことに抵抗がないように文字は大きめに読みやすく書いてある。最近では4mm原稿の横書きを使っている。

#### (b) 漢字はほどほどに

読み手の中には読むことが不得意の人や、日頃あまり読む機会がないという人もいるかもしれないので、むずかしい漢字や書き方をすると読むことがおっくうになってしまうのではないかと考え、中学年程度の漢字にし、むずかしい漢字はさけている。

#### (c) カットを入れて楽しく

文ばかりでは読みづらいので、ところどころにカットを入れて楽しく読めるようにしている。カットは子供たちにもかいてもらったものを入れている。時々全員に紙を配って好きなカットをいくつか書いてもらい、それをいつも持っている。その中から選んで使っている。これもかたよりのないように使った子の名はチェックしておき、全員のカットがのるようにしている。学級通信にカットがのったら、その子供の名前も「○○君のカット」というふうに出すようにしている。

## 3. おわりに

毎日子供と触れ合う中で見たこと、感じたこと、考えたこと、訴えたいことを学級通信に書いてきた。

どういう子に育てたいとか、どういう授業をやっているのか、なぜ授業をやるのか、あの子が生まれてはじめてこんなことができた、子供ってこんなことを考えているんだなあといった様々な驚きや発見。その日に何かが発見できたときは、わくわくした気持ちで実にすらすらと筆が進むものである。また自分なりに工夫して授業してみたら子供たちもとても意欲的に授業に取り組んでいたというときも同じである。反対に、子供に目が向いていないとき、授業と真剣に取り組んでいないときには子供が見えないし、何の発見もできない。そんな日の学級通信は紙とにらめっこでなかなか書くことがうかばない。

学級通信は目的ではなく手段である。生き生きと積極的に子供たちや、授業に取り組むことが一番大切なことであると思う。学級通信はそんな自分の姿を写しだす鏡のようでもある。そして学級通信を書きながら子供のこと、授業のことを考える。書くことによってわかったこと、反省させられたり、発見できたこともある。きっと書かなかった、そのまま何も考えず気づかずに通りすぎてしまったことがずいぶんあったような気がする。

毎日のように学級通信を出すなんてとてもできないとあきらめていたことができたのは、すばらしい実践をしている先生に出会えたことと、通信を読むことを楽しみに待っていてくれた親た

ちの励ましの手紙や言葉、そして喜んでくれた子供たちがいたからだと思う。今受け持っている子供たちは、毎日通信を出しはじめたとき、「きょうもでた。」「またきょうもでたよ。」「先生すごい。」「あんまりはりきるとばてちゃうよ。」など配るたびに声をかけてくれたのである。

学級通信によって親に学校のことや授業のことを理解してもらえ、それで毎日の実践がやりやすくなったという面もある。子供にも友だちの考えや行動がわかり刺激になったという面もある。そういうことを考えると親と子供と教師の関係を親密にし、かかわり合いをもたせる上で学級通信は重要な役割を果たしてきたと言える。学級通信は目的ではなく手段であるので、毎日の子供たちとの取り組み、授業実践が最も大切なものであることを念頭に置きながら、学級通信という“鏡”は常に出していきたいと思っている。

## 評

児童生徒を中心に、担任と保護者との連携を密にする方法として、よく学級通信が採りあげられます。この学級通信はだれでも簡単に口にしますが、継続して定期的に発行することは非常に難しいものです。「言うは易く、行ふは難し」です。しかし、「継続は力なり」と言いますように、発行を重ねるに従い、非常に味わいのある奥深い学級通信に変わってきます。このことは、学級通信が学級経営に十分機能していることを表している証拠ではないでしょうか。

よい学級通信の条件として、①発行する教師の個性が紙面に出ていること、②子どもたちの姿を生き生きと伝えること、③親と共に、子どもについて教育問題を考えあえる内容であること、等があげられます。

本実践記録も、8年間に1054号の学級通信を発行し、その内容として、授業風景、生き生きとした子どもの生活の様子、集会活動（連ダコ、おみこし等）、親との関わりあい（母親の手紙等）が採りあげられ、まさに上記の三条件を満たしたものであります。そのうえ、先生の子どもを見つめる目が実に細やかで、子どもの気持ちをとらえる感覚もシャープで、保護者でなくても読みごたえのあるものになっています。この学級通信は学級経営という面だけでなく、担任が子どもとの関わりを通して、自分をふり返り自分をみがく方法としても有効であるように思われます。今後とも、さらに継続されますことを期待します。